理解度&釣れる度100%

マルキユー

優良餌本®

パワーブック へらエサ

KEEP YOUR GOOD FISHING
爆釣を約束する餌本です

夏秋号 2018

Contents

02 両ダンゴの浅ダナ釣り
06 両ダンゴのチョーチン釣り
10 ペレットエサの宙釣り
14 両ダンゴの底釣り
18 ウドンセットの浅ダナ釣り
22 ウドンセットのチョーチン釣り①
26 ウドンセットのチョーチン釣り②
30 「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣り
33 「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り

HERA BAIT POWER BOOK

両ダンゴの浅ダナ釣り
食わせ重視のしっとり系

エサブレンド

「凄麩」200 cc＋
「バラケマッハ」200 cc＋
「カルネバ」200 cc＋
水150 cc

＋

＋

＋

●エサの大きさ

実寸大

ブレンドの考え方

●作り方

「凄麩」200 cc、「バラケマッハ」200 cc、「カルネバ」200 ccをボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 150 ccを注いでかき混ぜる。このとき、指を熊手状に大きく開いてダマができないよう丁寧に混ぜる。

●特徴

バラケ性のある『バラケマッハ』による集魚、『凄麩』のふくらみに寄るアピール、粘りでエサ持ちをよくする『カルネバ』とバランスの取れたブレンド。エサ全体が軽いのも特徴だ。

集魚とバラケ性

ふくらみ

エサ持ちとまとまり

●使い方のコツ

エサを半分に小分けし、使うほうのエサを押し練りしてエアーを抜いて使います。まずはこれでナジミ幅がきちんとでるかを確認。ウキにナジミがでなければ押し練りを繰り返す、または手揉みでエサ持ちを良くします。

しっかりナジミ幅をだすこと。食わせるためのエサの手直しが大切。

●エサ作り

まず、使う麩エサをエサボウルに入れるときは、計量カップすりきりで正確に測ります。麩エサをすべてエサボウルに入れたらこの段階で良く混ぜ合わせます。これは、違う性質のエサをムラなく混ぜるために行います。特に「カルネバ」などのネバリの強いエサをブレンドする場合は、必ずこの段階で均一になるよう混ぜてください。

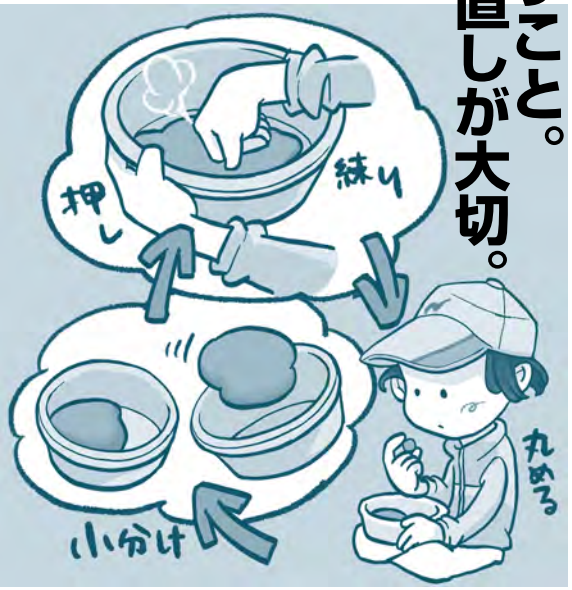
次に水を入れますが、150ccの場合は、100ccカップと50ccカップを使い、それぞれ1杯ずつ入れるほうが、200ccカップで150ccを入れるより正確になります。

水を入れた後、指を熊手状に大きく開き丁寧にかき混ぜますは、このとき、エサボウルを持って揺らしながら混ぜるとダマになりにくくなります。麩エサの乾いている部分がなくなるまでかき混ぜれば基エサの完成です。完全に吸水させるためにしばらく置いて、さらにかき混ぜるとより完璧といえるでしょう。

●エサの使い方

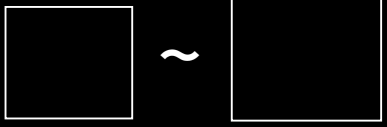
実際に使用するときにはエサを小分けにします。約半分を別のエサボウルに分けます。ここでエサに含まれているエアーを「押し練り」で抜きます。「押し練り」は小分けしたエサをボウルの隅一ヵ所に集めて、エサの上から指の甲側で数回押します。押されたところのエサはエアーが抜けて丸めやすくエサ持ちが良くなります。エサを丸めるときは、濡れたタオルで指先を湿らせておくとエサの表面がボソボソになりません。

このようにしてエサを打っていきますが、まず大切なのは自分なりの普通のエサ付けをして3目盛り程度のナジミ幅がでているかどうかです。魚がいない打ち始めの状態で確認することがポイントです。



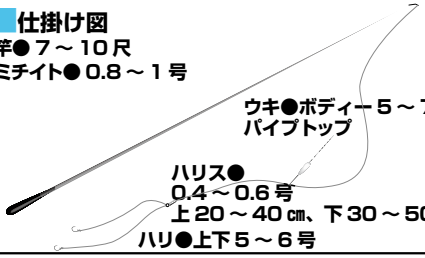
●オモリ 実寸大

0.25㎜厚板オモリ 15㎜×17㎜～17㎜×20㎜



■仕掛け図

竿● 7～10尺
ミチイト● 0.8～1号



しばらくエサを打ち続けると、へら鮒が寄ってきます。そしてサワリやアタリがでますが、魚が寄ったところでもきちんとナジミ幅がでているかチェックします。もし、ナジミ幅が少ない場合は、エサを練ります。

そして、力強いアタリでヒットしないときはエサの持ちすぎ（硬い・大きい・粘りすぎ）が考えられますので手直し（微調整）を行います。

①硬い場合は使用しているエサに手水を打って、柔らかくします。

②エサのサイズが大きすぎるときは、サイズを写真よりも小さくします。

③粘りすぎのときは使用しているエサに手水を打って、柔らかくしてから基エサを合体させます。

へら鮒の寄り具合によって状況はさまざまですが、①～③の手直しをしながら釣っていきます。

●セッティングの注意点

ハリスの長さは、基準になる寸法を決めておくと調整しやすいです。釣り場の状況で異なりますが、スタートを25㎝と35㎝とした場合、ウキの動きが少ないときには30㎝と40㎝に、反対に高活性時には20㎝と30㎝とすると判断しやすくなります。

エサ持ちアップのネバ系

「凄麩」200 cc＋
「GTS」200 cc＋
「カルネバ」200 cc＋
水150 cc

＋

＋

＋

魚の寄りがきついときなど、エサ持ちを重視してもう少しネバリを強くする場合は「バラケマッハ」の代わりに「GTS」をブレンドします。やや吸水率が異なりますので柔らかくなります。

両ダンゴのチョーチン釣り
軽さでアピールしながら確実に持つ

エサブレンド

「パウダーベイトヘラ」400 cc＋
「凄麩」200 cc＋
「カルネバ」200 cc＋
水200 cc＋
「バラケマッハ」100 cc

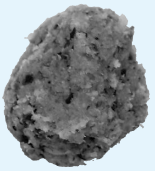
＋

＋

＋

●エサの大きさ

実寸大



ブレンドの考え方

●作り方

「パウダーベイトヘラ」400 cc、「凄麩」200 cc、「カルネバ」200 ccをボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 200 ccを注いでかき混ぜる。そこへ「バラケマッハ」100 ccを入れてエアーを含んだネバボソに仕上げる。

●特徴

魚の活性が分かりやすいエアーを含んだネバボソタッチ。ふくらみでアピールする。エサを持たせる「カルネバ」が入っているので押し練りの回数が少なくてすむ。管理釣り場でも野釣り場でも使えるブレンド。

中間的エサ持ち

ふくらみ

エサ持ちと軽さ

集魚とバラケ性

●使い方のコツ

エサを打って４～５目盛りのナジミ幅をだすようにする。思ったようにナジミがでないときは手水で 30 回混ぜる。魚が寄ってナジミが少なくなった場合も、この繰り返しで４～５目盛りのナジミ幅をキープする。

一定のナジミ幅をキープすること。アタリパターンを見極めよう。

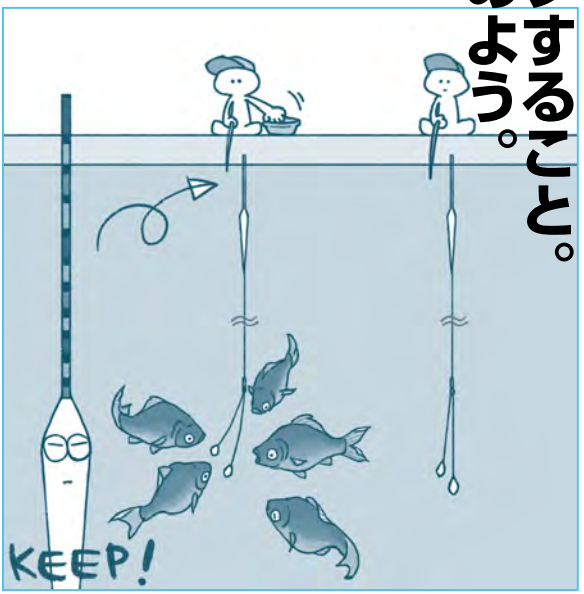
両ダンゴのチョーチン釣りは盛期の釣りですからウキが動かないということは少ないでしょう。どちらかといえば、ウキが動いているのにうまく釣れない場合が多いです。そのあたりを解説しましょう。

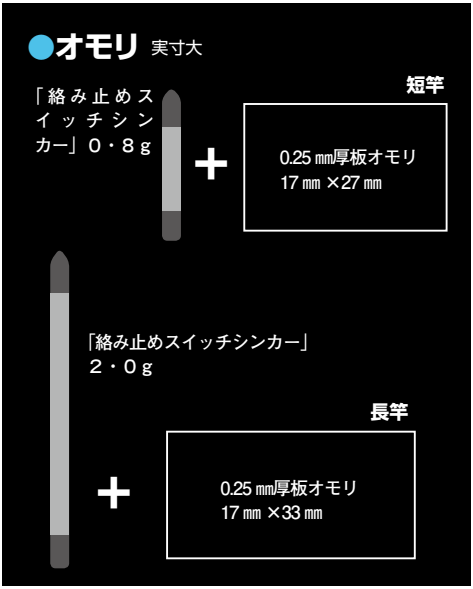
まず、その日の活性に対してセッティングが合っていない、弱すぎる場合があります。ウキが立たない、エサが入らない（ナジまない）というのはスタート地点に立っていないといえます。ウキがなかなか立たない場合はウキのサイズを大きくします。エサが入らないときは、エサを練るのはもちろんですが、上下のハリスを10㎝詰めてみてください。

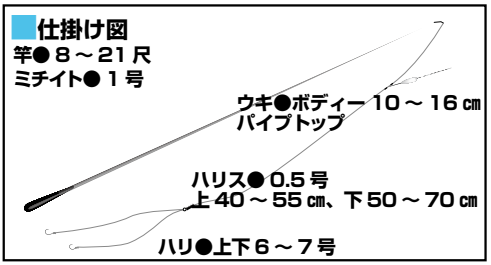
これでウキがすんなり立ち、ナジミもでるようになったら、エサ打ちを繰り返して魚を寄せます。必ず4～5目盛りはナジませることを心がけます。寄り始めは簡単に釣れると思いますが、ここからが難しいところです。

魚が寄ってくるとウキのナジミ幅が少なくなるはずです。そしたら手水でエサを30回ぐらいかき混ぜます。さらにウキ下の魚量が増えてナジミが悪くなったら、また手水でエサを30回ぐらいかき混ぜます。この繰り返しでかならず打ち始めと同じ4～5目盛りのナジミ幅をキープしてください。魚が寄った状態でナジミ幅少なくてアタると、食っている場合もありますが、スレやイトズレが多くなります。これはタナまで届いたエサ量が少ないから。ですからどんな状況でも同じナジミ幅を維持することは大切です。

逆にエサが持っているときにでるカラツンは、エサが持ちすぎています。まずはエサの大きさをひとまわり小さくしてみましょう。これで対処できないときは、ハリスを伸ばします。ハリスを





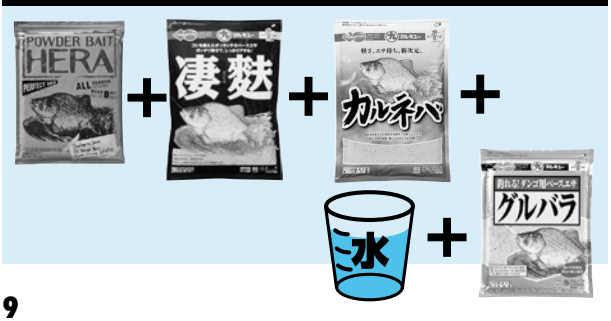


伸ばすことでエサが削られやすくなりますので、タナに届いたときにはちょうど食い頃の大きさになっているからです。このカラツンの場合、アタリがでているのでエサを軟らかくするという選択は最後にします。せっかくアタリがでるエサを手直しすることでダメにしてしまうことがあるからです。

アタリパターンは3つあります。ウキが立ってすぐ、エサ落ち目盛り近辺のナジミ途中、いったんナジんでからです。この中のどのアタリがでやすいか、ヒット率が高いかを見極めてアタリを選びます。アタリパターンが見えてきたら、あとはテンポ良く同じパターンで釣るようにします。早いアタリがヒットパターンのときはナジんだら打ち返す、深ナジミからのアタリがヒットパターンなら落ち込みのアタリは見送るなどです。

高活性時のブレンドパターン

「パウダーベイトヘラ」400 cc＋
「凄麩」200 cc＋
「カルネバ」200 cc＋
水150 cc＋
「グルバラ」100 cc



ペレットエサの宙釣り
混雑時などのライトペレ宙

エサブレンド

「ペレ軽」200 cc＋
「ガッテン」200 cc＋
「浅ダナ一本」100 cc＋
水100 cc

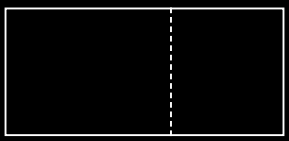
＋

＋

＋

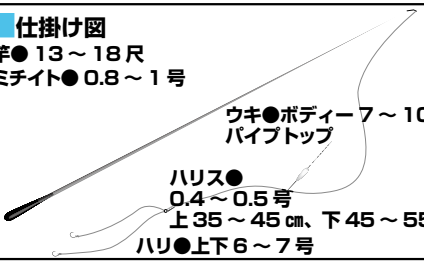
●オモリ 実寸大

0.25 ㎜厚板オモリ 17 ㎜ ×22 ㎜～ 17 ㎜ ×37 ㎜



■仕掛け図

竿● 13～18 尺
ミチイト● 0.8～1 号



ブレンドの考え方

●作り方

「ペレ軽」200 cc、「ガッテン」200 cc、「浅ダナ一本」100 ccをボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 100 ccを注いでかき混ぜる。このとき、指を熊手状に大きく開いてダマができないよう丁寧に混ぜる。麩エサの乾いている部分がなくなるまでかき混ぜて基エサの完成。

●特徴

『ペレ軽』はペレットによる集魚効果、『ガッテン』は粘りでエサ持ちをよくし、『浅ダナ一本』のふくらみでへら鮒にアピールする。『ガッテン』や『浅ダナ一本』はペレット系エサとの愛称も最高です

集魚効果

粘りでエサ持ち

ふくらみでアピール

●使い方のコツ

スタート時はできあがったエサ全体に手水を打ってナジミ幅がでるようにします。ペレット系ダンゴは重さがあるので、タナにへら鮒を寄せやすくなります。ただ、このブレンドは「ライトペレ宙」なので、両ダンゴ釣りの延長です。このエサでコンスタントに釣れるとき、さらに高活性の場合は、もう少し重さのあるブレンド（次頁）にします。

エサブレンド

「ペレ道」50 cc＋
「ペレ軽」200 cc＋
「ガッテン」200 cc＋
「BB フラッシュ」100 cc＋
水150 cc

＋

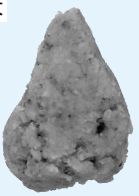
＋

＋

＋

●エサの大きさ

実寸大



ブレンドの考え方

●作り方

「ペレ道」50 cc、「ペレ軽」200 cc、「ガッテン」200 cc、「BB フラッシュ」100 ccをボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 100 ccを注いでかき混ぜる。このとき、指を熊手状に大きく開いてダマができないよう混ぜる。麩エサの乾いている部分がなくなるまでかき混ぜて完成。

●特徴

前頁のブレンドにくらべて「ペレ道」が加わることで、よりペレットの集魚と重さがある強めのブレンド。よりエサ持ちをよくするため「浅ダナ一本」を「BB フラッシュ」に変更している。

●使い方のコツ

ナジミ幅がでないときは使用しているエサを押し練り、握り練りを加えてエサ持ちを良くします。ウキが沈没してしまうようなときは、手水を打って「バラケマッハ」を振りかけながらバラケ性をアップさせます。

両ダンゴの底釣り
寄せ効果も期待できエサ持ち抜群

エサブレンド

「ペレ底」100 cc＋
「ダンゴの底釣り夏」100 cc＋
「ダンゴの底釣り冬」100 cc＋
水150 cc

＋

＋

＋

●作り方

「ペレ底」100 cc、「ダンゴの底釣り夏」100 cc、「ダンゴの底釣り冬」100 ccをエサボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 150 ccを注いでよくかき混ぜる。ボウルの隅に寄せ、エサがしっかり吸水するまでしばらく放置してから使う。

●使い方のコツ

できあがったエサを軽く押し練りしてから丸めてエサ打ちし、ナジミ幅を確認します。目安は 4 目盛り。もしナジミが少ないようなら手水で押し練りしナジミ幅を調整します。アタリがでない、サワリが少ないときは、『バラケマッハ』をパラパラ降りかけ、手水で硬さ調整をします。

エサブレンド

「ペレ底」50 cc＋「ダンゴの底釣り冬」150 cc＋「バラケマッハ」100 cc＋水200 cc

＋

＋

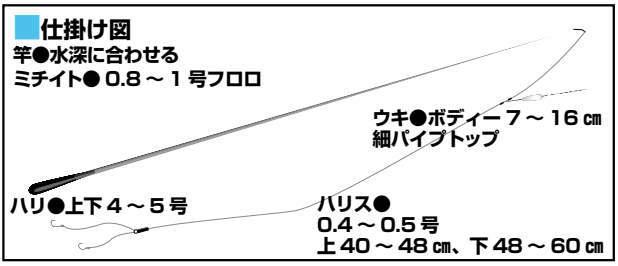
＋

右頁のブレンドは重さがあってエサ持ち抜群なので、魚が小さいときや食いがやや渋いときは軽いブレンドをためしたい。重くてバラける「ダンゴの底釣り夏」を抜き、軽くて持つ「ダンゴの底釣り冬」を多くする。底釣りでは“夏と冬”の特性を理解してうまく使い分けたい。

●エサの大きさ

実寸大

■仕掛け図



両ダンゴの底釣り
魚がいるときに固め釣りできる

エサブレンド

「ダンゴの底釣り冬」100 cc＋「とろスイミー」100 cc＋水130 cc

＋

＋

●作り方

「ダンゴの底釣り冬」100 cc、「とろスイミー」100 ccをエサボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 130 ccを注いでよくかき混ぜる。ボウルの隅に寄せ、エサがしっかり吸水するまでしばらく放置してから使う。使い方は前頁と同じ。

●特徴

新ベラが溜まっている、釣り堀などで魚が多くいるときに固め釣りできる。エサ持ちがよいので、小エサで回転よく釣っていく。

●エサの大きさ

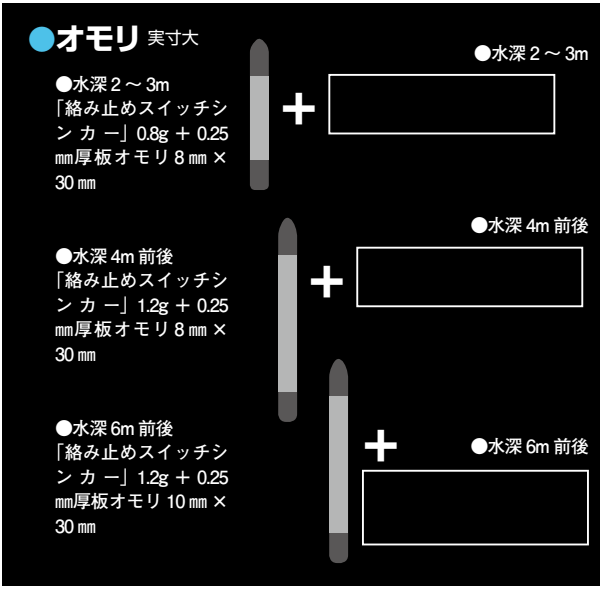
実寸大

スタートは上バリトントンから2㎝ズラしのタナに設定します。これでナジミ幅が4目盛りでるようにエサを押し練りで調整します。エサの大きさでナジミ幅は変わるので、最初は一定の大きさ（目安は写真参照）で打ちます。もし、エサをしっかり付けてもナジミ幅がでない場合は、タナを測り直しましょう。

底釣りは、エサで対応できる幅が少ない釣りですが、アタリの出方で分かることがあります。たとえば、早いタイミングのアタリでヒットするときはエサは大きい状態です。遅いタイミングならエサは小さくなっています。これをヒントにするなら、早いアタリで釣れるときはエサは大きめがよく、遅いアタリならエサは小さめがよくなります。こう考えると、その日の正解のエサの大きさが見えてくるはずです。

底釣りの基本といわれる、ナジんで戻してツンという動きがありますが、戻してとはエサ落ちまで戻してのアタリではありません。ナジんだところから戻してすぐのアタリです。ですから、底釣りは待ちの釣りと思われがちですが、そうではなく、攻めていくほうがよい結果がでます。

また、カラツンが多いときは、エサを小さくするか、ズラシ幅をを増やして底にエサを安定させます。ハリス段差は8㎝を基準に、10～12㎝くらいまで調整します。カケアガリがきつい所は広め、逆カケアガリなら狭くします。



ウドンセットの浅ダナ釣り

エサ持ちのコントロールが簡単！

バラケブレンド

「粒戦」100 cc＋
「粒戦細粒」50 cc＋
「サナギパワー」100 cc＋
水150 cc＋
「セットアップ」200 cc＋
「BB フラッシュ」100 cc

ブレンドの考え方

●作り方

「粒戦」100 cc、「粒戦細粒」50 cc、「サナギパワー」100 ccをボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから、水 150 ccを注いでかき混ぜる。吸水のため 5 分ほど放置したのち、「セットアップ」200 ccと「BB フラッシュ」100 ccを入れ、指を熊手状にしてムラにならないよう大きくかき混ぜる。

●特徴

バラケ性、寄せ効果の高い「粒戦」、「粒戦細粒」、「サナギパワー」を圧加減で持たせ方をコントロールできる「セットアップ」、エサ全体をつなぐ「BB フラッシュ」でまとめている。

集魚とバラケ性

エサ持ちとまとまり

●エサの大きさ

実寸大

●使い方のコツ

基エサを半分くらい小分けにして手水で 3 ～ 4 回ほどかき混ぜてから打ち始める。サワリがあるのにアタリがでないときは、さらに手水でかき混ぜるを繰り返してしっとりさせバラケ性を抑える。軟らかくしてエサが持たないときは練りを加えていく。

上バリを食ってきてもOK！しっかりナジませて釣ろう。

ウドンセットの浅ダナ釣りは冬の釣りと思われがちですが、夏時期でも混雑時や天候などで思わぬ食い渋りに遭遇し、両ダンゴや「ヒゲトロ」セットではアタリをだしきれないときがあります。

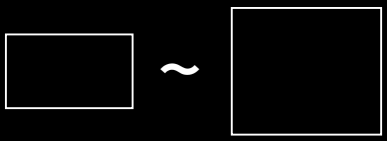
ウドンセットの浅ダナというと「抜き」（バラケをウキがナジむ途中で抜いてしまう）や「ちょい持たせ」（ウキを一瞬ナジませてからすぐバラケを抜く）などの釣り方が近年の流行りですが、夏場は違います。抜き系の釣り方ではねらっているタナよりへら鮒が上がってしまい、アタリがでづらくなる場合があります。ですから、ウキをしっかりとナジませてバラケが付いているときのアタリをねらいます。この釣り方が効かないようであれば「ちょい持たせ」や「抜き」へと移行していきます。

しっかりナジませて釣るということはねらっているタナにへら鮒を溜めていけるので競い食いが起こり、食いアタリが早くでて長続きするメリットがあります。この釣り方で失敗しやすいのがバラケエサのバラけすぎです。矛盾した言い方のようですが、バラけすぎてしまうとへら鮒がバラけた粒子ばかり食ってしまい肝心のウドンに興味がなくなります。サワリはあるのになかなか食いアタリがでない場合は、バラケに手水を打ちながらかき回してしっとりさせていきます。この対応でバラケの抜けが早くなってしまうようであれば今度はバラケを少しずつ練り込むようにしていきます。この時期にかぎり「バラケエサだからバラケなくてはいけない！」ではないのです。

またセット釣りでよく

●オモリ 実寸大

0.25㎜厚板オモリ 10㎜×17㎜～17㎜×20㎜



■仕掛け図

竿● 7～10尺
ミチイト● 0.8～1号
ウキ●ボディー5～7㎝
パイプトップ
ハリス●
上0.5～0.6号6～8㎝
下0.4～0.5号25～40㎝
ハリ●上7～8号、下3～5号

あるバラケエサの付いた上バリにへら鮒が食ってきます。好みの問題もあるかと思いますが、これは歓迎しましょう。バラケエサが合っている証拠でもあり、これを嫌ってしまうとバラケエサの抜けを早くしてしまいタナが崩壊して釣れなくなってしまいます。両ダンゴで釣れる時期ですから上バリのバラケに食ってきて当然なのです。

渋いといってもへら鮒が多く寄っておりバラケエサの調整だけでは難しい場面もでてきます。そんなときはウキや上バリのサイズをワンランク上げてみてください。今までナジまなかったウキがナジむようになります。

ウキの動かし方ですが、基本的には深ナジミしているときに出る力強いアタリが本命。またエサ打ちを繰り返しへら鮒が多く寄りだすとウキが立ってナジむ途中に1目盛りくらい小さくても力強いアタリがで始めます。このアタリもとっていきましょう。意外とウドンを食ってくるものです。やはり人よりも釣果を伸ばすのであれば早いアタリにも手をだすべきです。早いアタリを取ることによりウワズリを心配されるかと思いますが、早いアタリがでているということはバラケエサを調整してまとまりのよいエサになっているはずです。たとえ空振りしてもまとまりのいいエサは広がらず落下するのでウワズリは気になりません。

エサ落ち目盛りはウドンを付けた状態で水面上に4目盛り出しに設定します。冬のウドンセットの浅ダナ釣りでは1～3目盛りだしに設定する場合が多いですが、バラケを持たせて釣る夏場は水面上にだす目盛りが少ないとトップが沈没してしまうなどバラケエサの持たせ具合のコントロールが難しくなるからです。

バラケエサが抜けてウドンだけになった状態でサワリがあれば10～20秒ほど食いアタリがでるかどうか待ちますが、サワリもない状態ならばすぐ打ち返します。サワリもないのにいつまでも待っているとへら鮒の寄りをキープできません。また、食いアタリは意外と早くでますので、頭に入れておきましょう。

ウドンセットのチョーチン釣り①
しっかりナジませて釣る基本パターン

バラケブレンド

「粒戦」100 cc＋
「とろスイミー」50 cc＋
「サナギパワー」100 cc＋
水200 cc＋
「凄麩」300 cc＋
「BBフラッシュ」100 cc

＋

＋

＋

＋

ブレンドの考え方

●作り方

「粒戦」100 cc、「とろスイミー」50 cc、「サナギパワー」100 ccをボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから、水 200 ccを注いでかき混ぜる。吸水のため 5 分ほど放置したのち、「凄麩」300 ccと「BB フラッシュ」100 ccを入れ、指を熊手状にしてムラにならないよう大きくかき混ぜる。

●特徴

バラケ性、寄せ効果の高い「粒戦」、「サナギパワー」を「とろスイミー」の重さ、エサ全体をしっかりさせる「凄麩」、エサ全体をつなぐ「BB フラッシュ」でまとめている。

集魚とバラケ性

重さ

エサ持ちとまとまり

●エサの大きさ

●使い方のコツ

基エサを半分くらい小分けにして手水で 3 回ほどかき混ぜてから打ち始める。エサを深ナジミさせ、そこでしばらく耐えるように手揉みの回数で調整する。ウキの入りが悪い場合は、表面を丁寧に転がすほか、エサ付けの大きさでトップ 1 目盛り残しまでナジませるようにする。

ウドンセットのチョーチン釣り①
釣り方とセッティング

深ナジミさせてからウキがゆっくり上がってくる間の力強いアタリを狙う

ウドンセットのチョーチン釣りは、抜きバラケの釣りや大きなバラケを打ち切る釣り方などいろいろありますが、夏期はその中間的なパターンが基本です。

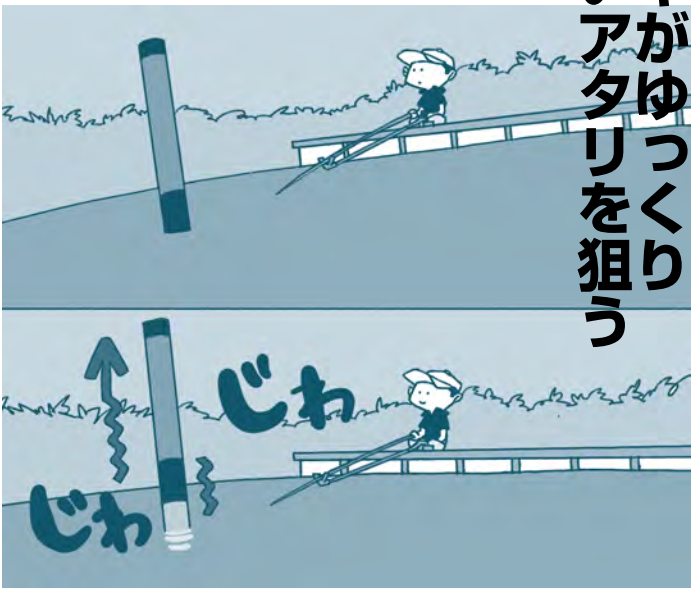
やはりこの時期はバラケエサをタナまで持たせないとアタリが続きません。ただし、持たせるといってもいつまでもウキがナジんだままではダメです。

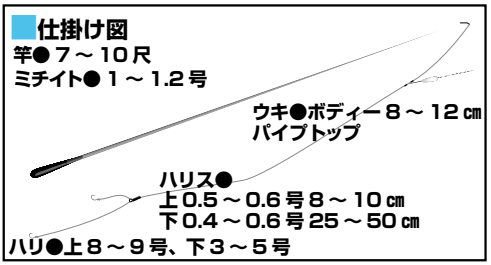
理想的な動きは、ウキが立ってバラケの重さがかかりトップがナジんでいきます。そしてトップ1目盛り残しまで深くナジませます。ナジませたらそこで10秒ほど耐えさせエサ落ち目盛りまでゆっくりと上がってきます。この戻る間にでる力強いアタリを狙います。このとき、エサ落ち目盛りまでゆっくり上がるのがポイントで、アタリがでないときほどゆっくり上げます。

うまく1目盛り残しができずウキが沈没してしまうならバラケエサを小さくするか、エサ付けの際に行なう手揉みの回数を減らします。逆に1目盛り残しまでナジんでもすぐにトップが上がってきてしまうようならバラケエサを大きく付けるか、エサ付けの際の手揉み回数を増やします。

また渋いときは1目盛り残しで耐えているときにしか力強いアタリがでない場合もあります。この場合もバラケエサを大きく付けるか手揉み回数を増やして耐える時間を長くします。

基本的にはバラケエサが付いているときのアタリを狙いますので、エサ落ち目盛りがでたら待たずに打ち返します。ここで待ちすぎてしまうと寄せたへら鮒をキープすることができません。また





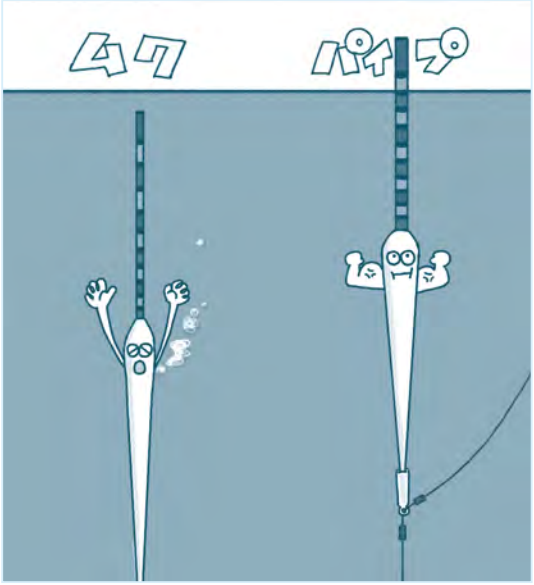
この釣り方の場合、不思議なものでバラケエサが抜けてウドンだけになってからのアタリは空振りやスレになりがちです。

エサ落ち目盛りはトップの太さやトップの素材にもよりますが、ウドンを付けた状態で6～7目盛り出しに設定します。

ムクトップを使用していて、どうしてもトップが沈没してしまう場合にはパイプトップに変更してください。ムクトップは細くエサのサイズが少し変わっただけで沈没してしまいますので、バラケエサのコントロールが難しくなります。

逆にパイプトップはムクトップよりも太く耐える力もあります。大きなエサも打てるのでへら鮒をたくさん集められるメリットもあります。深ナジミさせながらの釣りではアタリが力強くでますので、パイプトップでも全く問題はありません。チョーチン釣り＝ムクトップと思われがちですが、パイプトップの力を借りるとバラケエサの微調整も軽減され釣りが楽になります。

また上バリのサイズもバラケエサがすぐに抜けてしまうようであればワンランク大きくします。ハリサイズをアップすることでバラケエサをそれほど調整することなく持たせられますので、開きがよくなりさらにへら鮒を集めることができます。そうなれば自然とアタリ数も増えるのです。



ウドンセットのチョーチン釣り②
大きなバラケエサとくわせエサで釣る強い釣り

バラケブレンド

「バラケマッハ」700 cc＋
「浅ダナ一本」200 cc＋
水200 cc

＋

＋

くわせエサ **「力玉ハードⅢビッグ」**

見た目は俵型で、カラーはホワイト。ワラビウドンタイプのくわせエサで「力玉ハードⅡ」よりさらに大きくなり重量比約５倍にウエイトアップ。ハリ持ちに優れ、活性が高いときでも、大きさと重さでハリスがしっかりと張り、明確なアタリがでます。へら鮒のあおりに負けず、そしてその大きさにより大型べらにもアピールできる夏季限定品。

ブレンドの考え方

●作り方

「バラケマッハ」700 cc、「浅ダナ一本」200 ccをボウルに入れ、粉の状態で良く混ぜ合わせてから、水 200 ccを注いでかき混ぜる。自然な粘りが感じられるぐらい 30 回ほど混ぜる。作りたてはエサが持ちにくいので、少し置いてエサが締まってから使う。

●特徴

軽くて開く「バラケマッハ」をベースにして強力な集魚効果を利用する。「バラケマッハ」だけではエサが持たせられないので、『浅ダナ一本』をブレンドしてまとまり感をだす。

集魚とバラケ性

エサ持ちとまとまり

●エサの大きさ

実寸大

●使い方のコツ

仕上がったバラケエサを大きめに付けトップギリギリか沈没してしまうくらいまでナジませる。エサ持ちが悪くなったら手水でエサボウル全体をかき回しボソをなくすようにシットリさせる。エサ付けも角がないように丸く丁寧に付けて深ナジミさせる。

ウドンセットのチョーチン釣り②
釣り方とセッティング

開く大きなバラケエサでへら鮒を大量に寄せ、大きなくわせエサでアピールして食わせる

近年、釣り場は限定されますが、開く大きなバラケエサを打ち切る強いウドンセットのチョーチン釣りで驚異的な釣果がでています。この釣り方は、バラケエサもくわせエサも大きいからか釣れてくるへら鮒もビッグサイズ。タックルも独特で通常のウドンセットでは考えられないような太いミチイトとハリス、大きめのハリ。そしてかなり大きなムクトップのウキを使います。

この釣り方の最大の特徴は「バラケマッハ」ベースのバラケエサです。開く大きなバラケエサを打って大量にへら鮒を寄せて釣ります。やりこなしている人は〝マッハ単品〟ですが、それをタナまでナジませるには慣れないと難しいので、「浅ダナ一本」をブレンドしてエサ全体にまとまり感をだしています。

そしてくわせエサには「力玉ハードⅢビッグ」を使用します。へら鮒を大量に寄せて釣るので、魚のあおりが相当強くなります。従来の小さいくわせエサではハリスを張らせることができません。ハリスが張らないということは、へら鮒がくわせエサを食ってもウキにその動きが伝わりません。ですから大きなくわせエサが必要になります。さらに、細いハリスでは絡んだり切られたりしてトラブルが多くなります。そこで太いハリスを使用します。つまり、ハリスが太く、ハリも大きめで、くわせエサも大きいことから、強いあおりの中でもハリスを張りやすくして強いアタリがでるようにするのです。

大きなくわせエサを使うメリットはもうひとつあります。それは、くわせエサをへら鮒に見せてアピールする効果です。通常のウドンセットは、バラけた粒子にくわせエサを紛れ込ませて吸い込ませるものですが、この釣りは、明らかにくわせエサのウドンをへら鮒に見せて飛びつかせる釣りです。そのためにもアピール力が重要なのです。これまでは、事前に太いウドンを大量に持ち込んでいましたが、この「力玉ハードⅢビッグ」ができたことで、この釣り方を手軽なものにしてくれました。

「バラケマッハ」ベースのバラケエサは軽いので、パイプトップではナジミ幅をだしにくい。ナジミ幅をだそうとエサを練り込むと開き不足になり、へら鮒を大量に寄せることができず、この釣り方が成立しません。ですからムクトップのウキを使用します。ムクトップは細いので軽いバラケエサでもナジミ幅をだせ

●オモリ 実寸大

0.25㎜厚板オモリ 17㎜ ×40㎜～ 17㎜ ×50㎜

■仕掛け図

竿● 8～10尺

ミチイト● 1.2～1.5号

ウキ●ボディー 10～15㎝
グラスムクロングトップ

ハリス●
上0.8～1号 10～12㎝
下0.6～0.8号 25～40㎝

ハリ●上 10～12号、下6～8号

ます。ムクトップでギリギリ持つバラケエサをタナまでゆっくりとナジませていくイメージです。

釣り方は、仕上がったバラケエサを大きめに付け、ウキのトップギリギリか沈没してしまうくらいまでナジませます。打ち始めは待たずに打ち返します。徐々にへら鮒が寄り始めるとバラケエサの持ちが悪くなり、ナジミ幅がでづらくなります。ここで手に水を付けながらエサボウル全体をかき回しボソをなくすようにシットリさせます。エサ付けも角がないように丸く丁寧に付けます。これだけでナジませやすくなります。

理想的なウキの動きは、ウキが立ってサワリをだしながらゆっくりナジんでいき、ナジミ切った所で消し込みに近い力強いアタリが本命です。ナジんでいく途中にサワリもでないようであればバラケエサに角を付けるラフ付けにし、ウキがゆっくりとナジむようにします。

ウキの動かし方としては、両ダンゴのチョーチン釣りの動きを目指してください。サワリながらナジんでいき最後にドカン！ ナジミ切った所で釣っていったほうが釣れ続きやすく型も良くなります。

バラケエサを調整してもナジミ幅をだしづらい場合には上バリを大きくしていきます。ハリをワンランク大きくしただけで楽にナジませられるようになります。また、下ハリスの長さは食いアタリがでないようであれば長くし、空振りやスレが多いようなら短くします。どちらも5㎝単位で調整します。

「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣り
しっかりエサ持ちしてナジミ幅をだす

バラケブレンド

「ガッテン」200 cc＋
「パウダーベイトヘラ」200 cc＋
「バラケマッハ」100 cc＋
水150 cc

＋

＋

＋

●エサの大きさ

実寸大

ブレンドの考え方

●作り方

「ガッテン」200 cc、「パウダーベイトヘラ」200 cc、「バラケマッハ」100 ccをボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 150 ccを注いでかき混ぜる。このとき、指を熊手状に大きく開いてダマができないよう丁寧に混ぜる。乾いた麩エサがないようにまんべんなく混ぜてください。

●特徴

エサのまとまりがよく、タナまでしっかり持つ『ガッテン』と中間的位置づけの「パウダーベイトヘラ」をベースに「バラケマッハ」でバラケ性を加え、寄せ効果もありながらしっかり持つブレンド。

まとまりとエサ持ち

中間的存在

集魚とバラケ性

●使い方のコツ

基エサの約半分を別のエサボウルに分け、「押し練り」や「握り練り」でエサに含まれているエアーを抜いて使います。両ダンゴのエサよりもしっかりとエサ持ちさせるようにこの作業を繰り返し、必ずナジミ幅がしっかりでるようにします。

「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣り
釣り方のコツとセッティング

しっかりエサをナジませて釣ろう。

この釣りは、両ダンゴの釣りからスタートして、なかなかコンスタントにアタリがでないときに有効な釣り方です。特徴は短バリスの釣りになるので明確なアタリがでやすく、バラケエサに近いところまで接近するへら鮒がターゲットになるので、比較的良型が揃うことです。

ですから、バラケエサをしっかり持たせることが大切です。そして、タナですぐ抜けるのでなく、ウキが深くナジんだところでこらえるようにして釣っていきます。

ウキは動くけど食いアタリが明確でない、スレやイトズレが多いときは、エサがバラけすぎている可能性が高いので、よりバラケエサをしっかり丁寧に付けてください。くわせエサの「ヒゲトロスペシャル」は少量ずつ水で戻して使用します。適量のトロロエサを手で軽く握り水に漬け込み、軽く水を絞ります。水で戻したトロロエサは皿などに置いて直射日光を避けるようにします。その理由は、高温になると繊維が弱くなり、ハリ抜けする原因になるためです。釣り座の日陰になるところで保管してください。

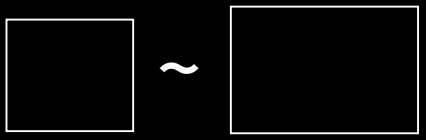
実際にハリに付ける量は釣り場の状況によって異なりますが、長さ3～5㎝、幅1㎝くらいを目安にしてください。

くわせエサ

適量を一発でエサ付けでき、その長さまでこだわり抜いた特別仕様。アルミパック（チャック袋）採用で開封後の品質が安定するので、1回の釣行で使い切らなくても、次回もそのまま使えます。

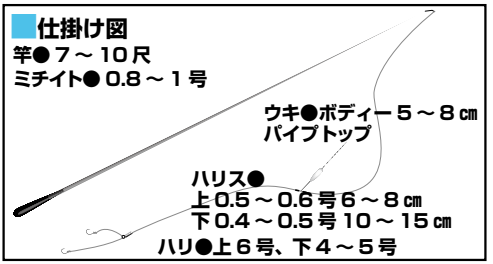
●オモリ 実寸大

0.25㎜厚板オモリ 15㎜ ×17㎜～ 17㎜ ×25㎜



■仕掛け図

竿● 7～10尺
ミチイト● 0.8～1号



トロロは軽いエサ！このイメージを頭に入れよう！

ヒゲトロセットのチョーチン釣りは、管理釣り場だけでなく野釣り場でも有効な釣り方です。浅ダナ同様、両ダンゴで釣り切れないときに試してください。

同じセット釣りでもウドンと違うのは、必ずバラケエサが持っているときにアタらせることです。上バリのバラケエサを食いにきたへら鮒が近くにあるトロロを吸い込む釣り方ですので、バラケエサが抜けてしまっては成立しません。言葉ではバラケエサと呼びますが、ダンゴタッチで少しバラける、というイメージです。

トロロエサは水中では大きく広がります。さらにへら鮒のあおりなどを受けますので、バラケエサの下にぶら下がるのではなく、横ぐらいに位置します（トロロは軽いくわせエサと認識してください）。ですからなおさらバラケエサ（ダンゴ）に興味を持たせないとアタリがでません。それだけバラケエサが重要になる釣りです。

その肝心のバラケエサは、標準タッチからややボソがある程度で打ち始め、手水でかき混ぜながら調整します。バラケエサの持ち加減、つまりバラケエサの量でアタリがでるパターンを探ります。エサがボソすぎると遠巻きになり、アタリがでにくくなります。また、サワリがあってもなかなか落とさない（アタらない）ときは、くわせエサのトロロが抜けている可能性があります。ハリに掛ける量を増やしたり、ハリに巻き付けるように付けてみましょう。

この釣り方はハリスの長さが重要になってきます。先述したようにトロロはあおりで漂いますので、ハリスの長さによってその位置が変わってきます。当然その日の状況により、へら鮒の寄り方が違いますので、シビアな調整が必要となります。1㎝単位で長さの違うハリスをチチワで用意しておくと、素早く対応できます。

「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り

管理でも野釣りでも対応する万能ブレンド

バラケブレンド

「凄麩」600 cc＋
「パウダーベイトヘラ」200 cc＋
水200 cc＋
「バラケマッハ」100 cc

＋

＋

＋

くわせエサ

水中でトロロはかなりのあおりを受けますので、しっかりハリ持ちする「ヒゲトロスペシャル」がおすすめです。

●エサの大きさ

実寸大

ブレンドの考え方

●作り方

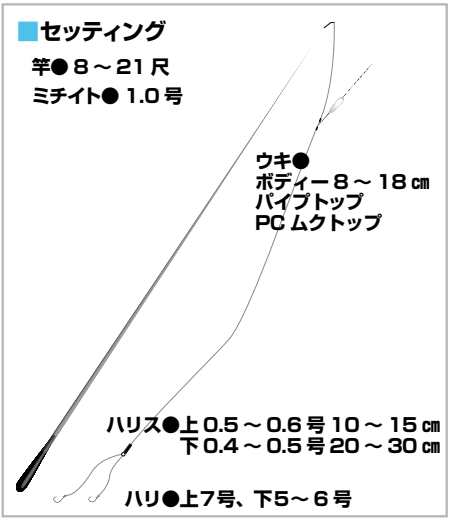
「凄麩」600 cc、「パウダーベイトヘラ」200 ccをエサボウルに取り、粉の状態で良く混ぜ合わせてから水 200 ccを注いでかき混ぜる。そこへ「バラケマッハ」100 ccを入れてかき混ぜ、エアーを含んだ状態で基エサとする。

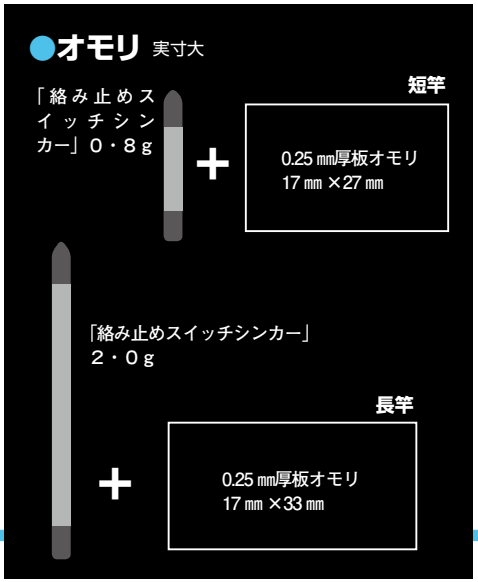
●特徴

ふくらみのある「凄麩」をベースにエサ持ちとバラケ性が中間的な「パウダーベイトヘラ」でエサ持ちを強調。バラケ性のある「バラケマッハ」でボソ感をだしている。

●使い方のコツ

基エサの約半分を別のエサボウルに分け、手水で 30 回ほどかき混ぜて使う。魚の寄りとともにナジミが悪くなったら、再び手水で 30 回ほどかき混ぜる。この繰り返しで調整する。





つれるエサづくり一筋
マルキュー

欲しかったのは、この大きさ。

ハードタイプならではの
極上のエサ持ち。
かつてないサイズの大きな粒。
高活性期のセット釣りに
新戦力のくわせエサ、
「力玉ハードⅢ ビッグ」登場。
●力玉ハードⅢ ビッグ 65g（夏季限定品）

へら鮒天国 Twitter、Facebookで情報配信中!

マルキュー株式会社
〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL.048-728-0909
ホームページアドレス http://www.marukyu.com/

2018.06.N.20000